

原子力に対するメディア表現の定量化

Quantification of Nuclear Expression by the Media

京大 院エネ科 大西 輝明 (Ohnishi Teruaki)

新聞がリリースする原子力報道記事を理性的表現部と感性的表現部とに大別し、全記事量に対する各部分の記事量の比をファジィ化することによって記事表現の定量化を図った。

キーワード：メディア表現、理性、感性、記事量、ファジィ、受容性

1. 序 原子力問題は我が国では常にメディアの注目するところであり、人々の原子力に対する受容性増減の大きな部分はその報道表現の如何にかかるとしても過言ではない。しかし、どのような表現がどの程度人々に影響を与えるものであるかについては全く明らかではない。当該側面を少なくとも定性的に議論しうることを目指して、報道表現の定量化を図る。

2. 方法 メディアとして新聞を選び、原子力に係る正または負の報道のみを取り出す。ここで正負の報道とは受容性を変動させ得るものであり、例えば負の場合、事故や故障に係る記事、および不安感、不信感、リスク感等を誘起させる記事をさす。表現を理性的表現と感性的表現とに二大別することとし、抽出した第 i 番目記事において対象事象を理性的に報道する部分、および感性的、感性的に報道する部分を次にそれぞれ抽出する。さらに、これらの部分記事量の当該報道全記事量に占める割合、 X_i および Y_i ($\in [0, 1]$) を算出する。ここで「理性的表現」とは書き手の持つ価値観が含まれることはなく、対象事象の事実のみの表現をさすものとする。記事中の表現は客観的であり、言語は言語そのものの持つ意味合いのみを指示する。従って、その表現によって既存の経験や出来事を連想させることはないものをさす。一方、「感性的表現」とは価値観が志向された主観的表現をさすものとする。修辞や比喻等の多用によって連想記憶が誘起され、連想性想起を促しうるセンセーショナル表現をさすものと定義する。任意の文章は通常、これら二表現の混在するものであり、その混在程度がどのようなものであるか、または、どちらの表現により強く偏っているかの判断は極めてあいまいであり、個々人の経験や社会環境等に依存して各人毎に大きく異なる。従って、上記の X_i および Y_i 値を人々の集団に対する分布値に変換するために、ファジィ理論での対称三角型メンバーシップ関数を導入するものとし、これによってファジィ測度 X 、 Y におけるファジィ度 f_i を得る。記事 i の報道量 Z_i に f_i 値を重みとして掛け、さらに任意の一月月についての和をとって、これを当該月の (X, Y) における表現強度 Z とする。

3. 定量化例 X ：理性度、 Y ：感性度、および Z の組を新聞表現量とする。図 1 に 1997 年 2～4 月における朝日および福井の各新聞の負の記事に係る表現量 (X, Y, Z) の分布を示す。ここで、報道量は[カラム・cm]単位の記事面積で与える。1997 年一カ年に渡る月毎の表現量の経時変化状況や、この変化状況と人々の原子力に対する受容性の変動状況との関連性について議論する。

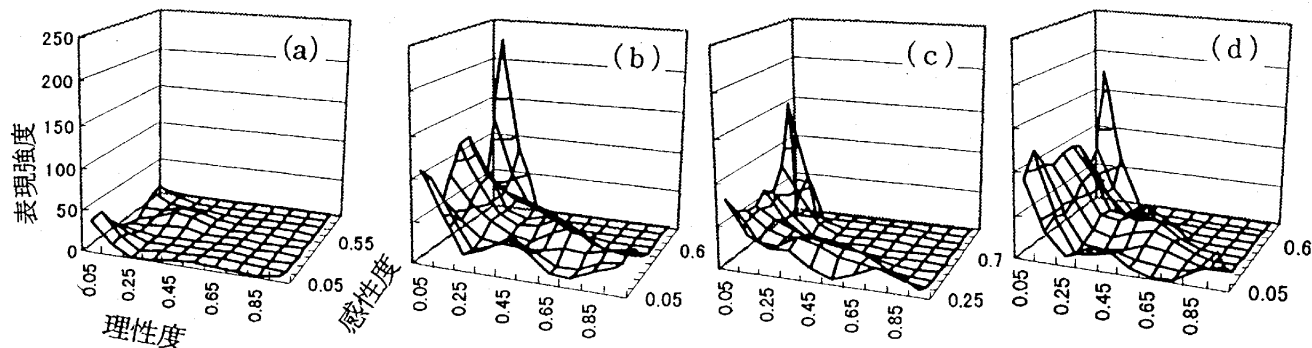


図 1. 新聞表現量の三次元プロット例 (a) 朝日新聞 1997 年 2 月 (b) 同 3 月 (c) 同 4 月 (d) 福井新聞 1997 年 3 月